

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009-2012

課題番号：21530707

研究課題名（和文）親密な友人により形成された排他的な仲間集団が、学校不適応に及ぼす影響

研究課題名（英文）Impact of exclusive peer groups formed by close friends on school maladaptation

研究代表者

三島 浩路(MISHIMA KOJI)

中部大学・現代教育学部・教授

研究者番号：90454371

研究成果の概要（和文）：仲間集団に対する指向性の一つである「固定的な集団指向」が、学級の離散的な雰囲気に影響を与え、離散的な学級の雰囲気が、仲間集団に対する指向性の一つである「独占的な親密関係指向」に影響を与え、さらに、「独占的な親密関係」が「固定的な集団指向」に影響を与えるという、循環的な過程が存在することが、小学校高学年女子・女子中学生・女子高校生に関して示唆された。また、小学校高学年女子に関しては、「独占的な親密関係指向」が、学級適応感に負の影響を与えることも示唆された。

研究成果の概要（英文）：“Directivity toward fixed groups,” which is one of the directivities concerning peer groups, affects a discrete atmosphere of classes. This discrete atmosphere in turn impacts “directivity toward monopolized friendship,” which is one of the directivities concerning peer groups. Furthermore, “monopolized friendship” has an impact on “directivity toward fixed groups.” The existence of this cyclical process with respect to girls was suggested in the upper grades of elementary schools, middle schools, and high schools. Moreover, it was indicated that “directivity toward monopolized friendship” has a negative impact on the feeling of school adaptation among girls in the upper grades of elementary schools.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：学級集団, 適応, コミュニケーションスキル

1. 研究開始当初の背景

学級内で孤立している児童・生徒の中には、学校生活に対する適応感が低い児童・生徒が多い(Parker & Asher, 1987; Rubin, Bukowski, & Parker, 1998)。また、学級内で他の児童・生徒から排斥されることが、反社会的な行動傾向(Vitaro, Brendgen, &

Tremblay, 2000)や抑鬱傾向(Gazelle & Ladd, 2003)の強さと関連するという指摘もある。そのため、学級内で孤立している児童・生徒が友人をつくることできるように、学級担任等が様々な配慮をする(三島, 1997)。また、学校生活の中で児童・生徒は、様々なストレスを感じているが(三浦・坂野, 1996)、親しい

友人からサポートを受け、ストレスの低減を図ることができる(山口・水野・石隈, 2004)など、親しい友人がいることは、児童・生徒の不安や抑鬱傾向を抑える上で大きな役割を果たしている(Buhrmester, 1992)。このような理由から、親しい友人がいることは、児童・生徒の学校生活に対する適応感を高めると考えられてきた。

しかし、親しい友人との関係が、児童・生徒の学校生活に対する適応感を低下させる可能性もある。粕谷・河村(2005)は、対人関係の中で不安を感じたり、過度に親密であることを求めたりすることが、仲間集団の中における他者との関係性に問題を生じさせる可能性があることを指摘している。吉原・藤生(2005)は、友人関係の在り方とストレス反応との関係を調べ、友人関係の親密さとストレスとの間に正の相関がみられたことを報告している。また、三島(2007a)が行った調査の結果によれば、友人との親密な関係を強め、排他的な仲間集団を形成した女子児童は、学校生活に対する適応感を有意に低下させた。以上のことから、親しい友人により形成された流動性が小さく固定化した仲間集団に所属することが、適応感を低下させる可能性がある。さらに、男子に比べてより親密でより排他的な仲間集団を形成することが多い女子(Berndt, 1982; Durkin, 1995; 榎本, 1999)の方が、仲間集団内の「いじめ」が多く(三島, 2003)、そうした「いじめ」の背景にも、仲間集団の排他性が関連している(三島, 2007b)。

このような理由から、友人との親密な関係が、児童・生徒の学校生活に対する適応感を高めるとは単純に考えにくく、親しい友人との関係が、学校生活に対する適応感を高める方向で機能するプロセスと、適応感を低下させる方向で機能するプロセスとが存在するのではないだろうか。両プロセスのうち、親しい友人により形成された仲間集団の排他性が、学校生活に対する適応感を低下させるプロセスに関しては、これまで研究がなされていない。そこで、親しい友人同士によって形成された仲間集団の排他性が、学校生活に対する適応感に負の影響を与えるプロセスについての検討を試みる。

2. 研究の目的

小学校中学年以降、特定の親しい友人をつくり、親密な関係にある友人同士により形成された仲間集団で行動する児童・生徒が多くなる。たとえば、同じ仲間集団に所属している児童・生徒が集まって休み時間を一緒に過ごしたり、グループ学習を行うためにグループ編成を行う際には、仲間集団を基本としたグループ編成を求めたりする。その結果、同じ仲間集団に所属していない児童・生徒とかわり合うことや会話することは、相対的に

少なくなり、仲間集団が固定化される。同じ仲間集団に所属している親しい友人と話をしたり、休み時間を一緒に過ごしたりするなどして、仲間集団を固定化しようとする指向性を、三島(2008)は「固定的な集団指向」としている。

本研究では、仲間集団の「固定的な集団指向」が強まった結果、離散的な学級雰囲気を生じさせ、開放的で親和的な学級雰囲気を損なわせるといったモデルを検証する。

三島(2008)は、仲間集団への指向性に関する調査・分析を行った結果、極めて親しい特定の友人との親密な関係を背景に、その関係には属さない第三者に対する排他的な考え方や行動傾向の強さである「独占的な親密関係指向」と、「固定的な集団指向」の2つの因子により、仲間集団への指向性が構成されるとした。

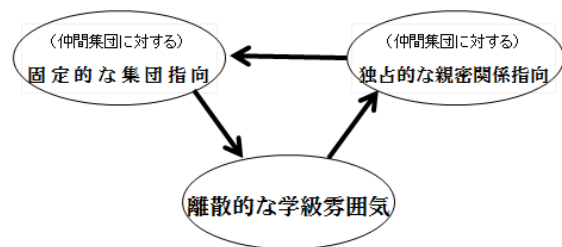


Figure1 仲間集団に対する指向性と学級雰囲気の間接的関係

学級内に存在する個々の仲間集団が「固定的な集団指向」を強め、離散的な雰囲気が強まった学級で、既存の仲間集団から排除されると、他の仲間集団に入ることが難しいために学級内で孤立する可能性が高まる。学級内で孤立することは、不快なことである(大嶽, 2007)ため、離散的な雰囲気が強まった学級においては、仲間集団から排除されることを避けようとする傾向が一段と強まり、仲間集団を構成している既存の友人に対して「独占的な親密関係指向」を強めることが考えられる。さらに、「独占的な親密関係指向」を強めることは、仲間集団をより固定化させることとなるために、「固定的な集団指向」をさらに強める結果となり、循環的な過程が形成される可能性がある(Figure1)。

本研究では、「固定的な集団指向」が学級の離散的な雰囲気に影響を与え、離散的な学級雰囲気が、「独占的な親密関係指向」を強めることにより、「固定的な集団指向」が強まるという循環的な過程を検討する。

ところで、仲間集団に対する「固定的な集団指向」や「独占的な親密関係指向」は、児童・生徒の学級生活に対する適応感にどのような影響を与えるのだろうか。

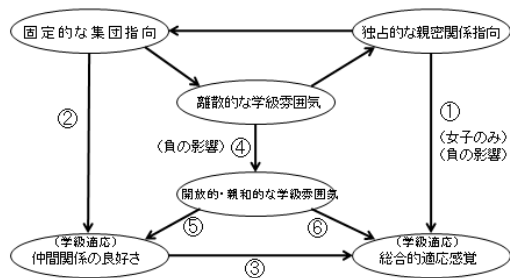


Figure2 仲間集団指向・学級雰囲気と学級適応感の関連

三島 (2007a)が小学5・6年生約500名を対象に、年度始めと年度末の2回、学級適応感と仲間集団指向性を質問紙法により調査・分析した結果によれば、「独占的な親密関係指向」を強めた女子は、年度末の方が年度初めに比べて、学級生活に対する適応感を低下させた。こうした結果が得られたことから、「独占的な親密関係指向」は、女子の学級生活に対する適応感に負の影響を与えることが予想される (Figure2 のパス①)。

一方、「固定的な集団指向」の強さは、仲間集団を形成している仲間との関係の固定化を望む強さを示すものである。関係の固定化を強く望むということは、仲間との関連が良好であると予想されることから、「固定的な集団指向」と、仲間関係の良好さとの間には、正の関連があることが予想される (Figure2 のパス②)。良好な関係にある親しい仲間をもつことは、学校生活に対する適応感を高めることが多くの研究によって支持されている (e.g., Garnefski & Diekstra, 1996 ; Pope, McHale, & Craighead, 1988) ことから、仲間関係の良好さは学級生活に対する適応感に正の影響を与えることが予想される (Figure2 のパス③)。

仲間集団に対する指向性が学級生活に対する適応感に影響することに加え、学級の雰囲気も、仲間関係に関連する適応状況をはじめとした学級生活への適応感に影響を与えることが予想される。

伊藤・松井(2001)は、「他の人と一緒にならないグループがある」、「グループ同士の対立はない (反転)」などの項目により測定された「学級内の不和」の程度と、「学級への満足感」との間に大きな負の相関があることを報告している。学級の離散的な雰囲気が強まれば、個々の仲間集団の「独占的な親密関係指向」が強まるだけでなく、学級の開放的・親和的な雰囲気が損なわれることも予想される (Figure2 のパス④)。小野寺・河村(2002)は、中学生を対象にした調査を行い、「学級全体」に対する自己開示が高い生徒ほど、学校生活満足感が高く、仲間との関係や学級との関係、教師との関係がより良好であるとい

う結果を得た。児童・生徒が自己開示しやすい学級とは、だれとでも自由に話ができる雰囲気があり、学級としての一体感がある学級であり、こうした学級のもつ雰囲気を、開放的・親和的な雰囲気とする。開放的・親和的な雰囲気は、児童・生徒の自己開示を高める可能性があることから、仲間関係の良好さや学級適応感に正の影響を与えることが予想される (Figure2 のパス⑤⑥)。

以上のような考えを Figure2 に示したモデルにまとめた。本研究では、このモデルの妥当性についても検討する。

3. 研究の方法(分析結果を含む)

(1) 中学生を対象とした研究

ア 方法

対象：A県N市の中学校2校に在籍する1年生 (男子241名・女子190名 合計431名) を対象に調査を実施した。欠損値があるデータは除外したため、分析対象者は403名 (男子225名・女子178名) である。

時期：2010年1月に実施した。

方法：それぞれの学級の担任教師が、ホームルームの時間を利用して質問紙を配布し、集団面接法により実施した。

質問紙の構成

以下の項目について5件法で解答する形式の質問紙を使用した。

仲間集団指向性：小学5・6年生用に開発された「仲間集団指向性尺度」(三島, 2008)の「固定的な集団指向」「独占的な親密関係指向」を測定する尺度項目の表現を中学生用に改め、「固定的な集団指向」に関連する7項目 (例：仲間と話をする方が、仲間ではない子と話をするよりも楽しい。仲の良い友だちだけで、かたまっ一緒にいると楽しい)、「独占的な親密関係指向」に関連する7項目 (例：自分のいちばん大切な友だちを、ほかの子にとられそうで心配になることがある。新しい友だちをつくる時、今、仲良くしている友だちのことが気になる) の合計14項目を用いた。

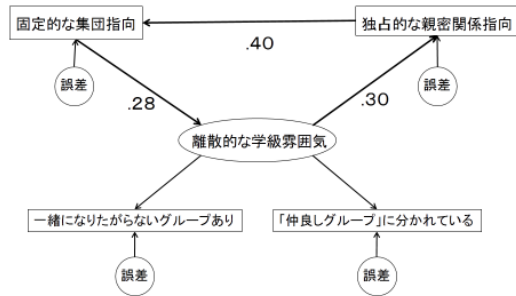
学級雰囲気：伊藤・松井(2001)が中学生用に開発した「学級雰囲気質問紙」を参考に、「離散的な学級雰囲気」に関しては、「クラスの中に、ほかの人と一緒にいたがらない『仲良しグループ』がある」「クラスのみならず、『仲良しグループ』に分かれている」の2項目、「開放的・親和的な学級雰囲気」に関しては、「このクラスは、全員がよくまとまっている」「このクラスで、新しい友だちをつくることは難しい (反転)」「このクラスには、だれとでも自由に話ができる雰囲気がある」の3項目を用いた。

学級適応感：小学5・6年生用に開発された「階層型学級適応感尺度」(三島, 2006)を基本に、尺度項目の表現を中学生用に改め、「総合的適応感覚」(学校に来るのは楽しい。学

校生活全般に充実感を感じる。学校に行きたくないと思うことがある(反転)3項目、友人関係に関連する適応状況をとらえる「仲間関係の良好さ」(困ったことがあったら、友だちに相談する。友だちには、自分の秘密など何でも話すことができる。友だちから自分は大切にされている)3項目を用いた。

イ 結果

(ア) Figure1 に示した循環的な過程の検証



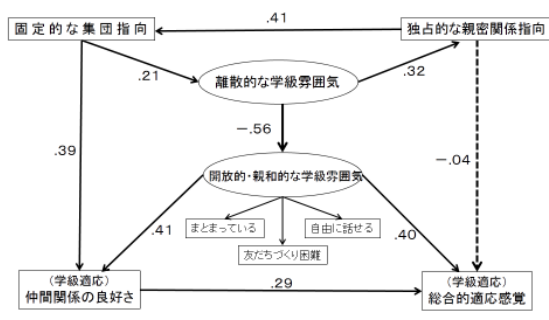
(実線は有意なパス、破線は有意でないパス)

Figure3 仲間集団指向性と学級雰囲気の関連(女子)

Figure1 に示した変数の関連をもとにしてモデルを作成し、共分散構造分析を行った結果、データに対するモデルのあてはまりは良好だった (GFI=. 99, AGFI=. 96, CFI=. 99, RMSEA=. 031)。しかし、男子の分析結果をみると、「固定的な集団指向」から「離散的な学級雰囲気」へのパスは有意な水準であるが、「離散的な学級雰囲気」から「独占的な親密関係指向」、「独占的な親密関係指向」から「固定的な集団指向」へのパスは共に有意な水準のものではない。一方、女子に関しては、モデルを構成するすべてのパスが有意な水準のものであった (Figure3)。

以上の結果は、Figure1 に示した循環的な過程が、女子に関してはみとめられることを示唆するものである。

(イ) 仲間集団指向性・学級雰囲気と学級適応感との関連



(実線は有意なパス、破線は有意でないパス 誤差・攪乱変数は省略)

Figure4 女子のデータによる 仲間集団指向性・学級雰囲気と学級適応感の関連

仲間集団指向性と「離散的な学級雰囲気」との循環的な関連が、女子に関してのみ存在することを示唆する結果が得られたことから、Figure2 に示した学級適応感との関連を

加えたモデル (Figure4) を作成し、女子のデータをもとにして共分散構造分析を行った結果、データに対するモデルのあてはまりはおおむね良好だった (GFI=. 95, AGFI=. 89, CFI=. 93, RMSEA=. 074)。パス係数をみても、「独占的な親密関係指向」から「総合的適応感覚」へのパス以外は、すべて有意な水準のものであった。

(2) 高校生を対象とした研究

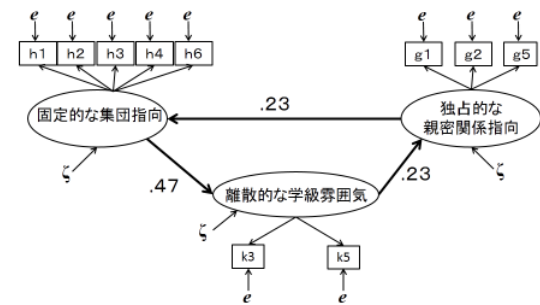
ア 方法

対象：B 県内の 13 校に在籍する高校生 1, 678 名を対象に調査を行い、すべての設問に回答した 1, 483 名 (男子 675 名・女子 808 名。1 年生 597 名 2 年生 441 名 3 年生 445 名) のデータを分析した。

調査時期：2011 年 10 月

イ 結果

(ア) Figure1 に示した循環的な過程の検証



(実線は有意なパス (p<.01) 破線は有意ではないパス)

Figure5 仲間集団指向性と学級雰囲気の関連(女子)

Figure1 に示した変数の関連をもとにしてモデルを作成し、多母集団同時分析による共分散構造分析を行った結果、データに対するモデルのあてはまりはおおむね良好であった (GFI=. 96, AGFI=. 93, CFI=. 91, RMSEA=. 052)。女子のモデル (Figure5) のパス係数はすべて有意な水準であったが、男子のモデルの「独占的な親密関係指向」因子から「固定的な集団指向」因子へのパスは有意な水準のものではなかった。

以上の結果は、Figure1 に示した循環的な過程は、女子高校生に関してはみとめられるが、男子高校生に関してはみとめられないことを示唆している。

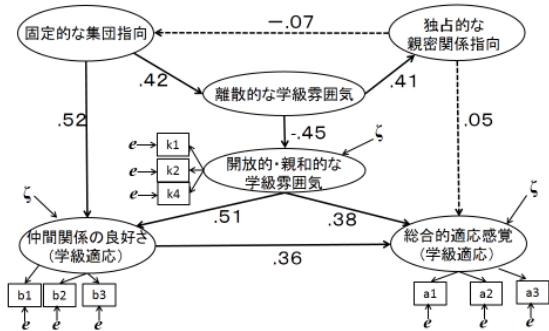
(イ) 仲間集団指向性・学級雰囲気と学級適応感との関連

Figure2 に示した学級適応感と仲間集団との関係を検証するために Figure6・7 のモデルを作成し、多母集団同時分析による共分散構造分析を行った結果、データに対するモデルのあてはまりはおおむね良好であった

(GFI=. 92, AGFI=. 90, CFI=. 89, RMSEA=. 046)。

「独占的な親密関係指向」因子から「総合的適応感覚」因子へのパスは、男女ともに有意な水準ではなかった。この結果は、高校生

に関しては、仲間に対する独占的な親密関係指向が、学級生活に対する楽しさの程度を示す総合的適応感覚に、男女とも影響を与えないことを示唆している。



(実線は有意なパス (p<.05) 破線は有意ではないパス)

Figure6 仲間集団指向性・学級雰囲気と学級適応感の関連(男子)

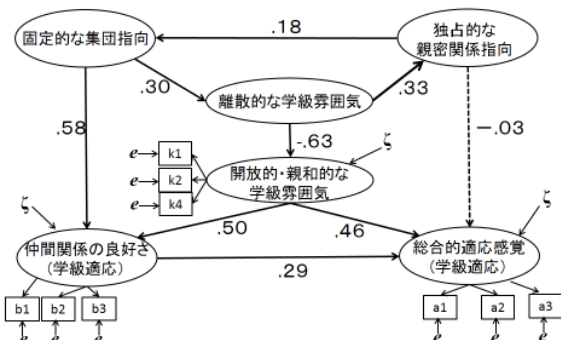


Figure5のモデルにある潜在変数の測定変数等の表記は省略 (実線は有意なパス (p<.05) 破線は有意ではないパス)

Figure7 仲間集団指向性・学級雰囲気と学級適応感の関連(女子)

「仲間関係の良好さ」に関しては、仲間集団指向性を構成する因子の一つである「固定的な集団指向」と、学級の雰囲気を示す「開放的・親和的な学級雰囲気」の双方からのパスが、男女ともに有意な水準のものであった。身近な親しい仲間により形成される仲間集団に対する意識と、所属学級の雰囲気とが、「仲間関係の良好さ」に影響を与えることをこの結果は示唆している。

(3) 小学生を対象とした研究

ア 方法

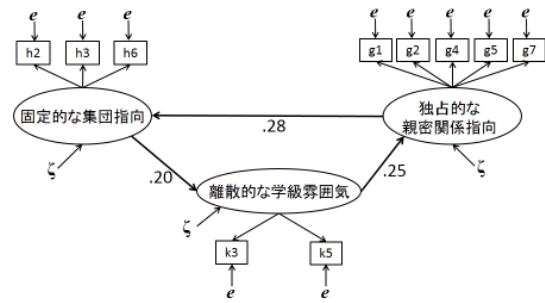
対象：C県D市内の小学校12校の5・6年生1,402名(5年男子373名,5年女子356名,6年男子339名,6年女子334名)を対象に調査を実施し、欠損値がない1,301名(男子653名,女子648名)のデータを分析した。

調査時期 2009年6~12月

調査方法：それぞれの学級担任が「朝の会」

イ 結果
(ア) Figure1に示した循環的な過程の検証
Figure1に示した変数の関連をもとにしてモデルを作成し、共分散構造分析を行った結果、データに対するモデルのあてはまりはおおむね良好であった(GFI=.97, AGFI=.94, CFI=.93, RMSEA=.045)。女子のモデル(Figure8)のパス係数はすべて有意な水準で

あったが、男子のモデルの2つのパス係数が有意な水準ではなかった。



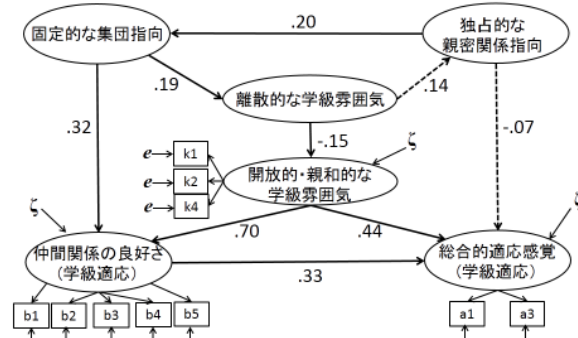
(実線は有意なパス (p<.01))

Figure8 仲間集団指向性と学級雰囲気の関連(女子)

以上の結果は、Figure1に示した循環的な過程が小学校高学年女子にはみとめられるが、男子にはみとめられないことを示唆するものである。

(イ) 仲間集団指向性・学級雰囲気と学級適応感との関連

仲間集団指向性と「離散的な学級雰囲気」との循環的な関連が存在することを示唆する結果が、小学校高学年女子については得られたことから、Figure2に示した学級適応感との関連を加えたモデル(Figure9・10)を作成し、共分散構造分析を行った。



(実線は有意なパス (p<.05) 破線は有意ではないパス)

Figure9 仲間集団指向性・学級雰囲気と学級適応感の関連(男子)

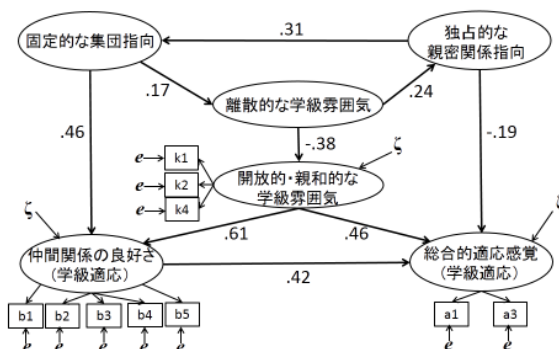


Figure8のモデルにある潜在変数の測定変数等の表記は省略 (実線は有意なパス (p<.01) 破線は有意ではないパス)

Figure10 仲間集団指向性・学級雰囲気と学級適応感の関連(女子)

その結果、データに対するモデルのあてはまりはおおむね良好だった (GFI=.91, AGFI=.88, CFI=.84, RMSEA=.048)。パス係数をみても、男子に関しては、「独占的な親密関係指向」から「総合的適応感覚」へのパスは有意な水準のものではなく、「独占的な親密関係指向」が学級生活に対する適応感に影響を与えていない (Figure9)。しかし、女子に関しては、すべてのパスが有意な水準のものであり、「独占的な親密関係指向」が「総合的適応感覚」に、有意な負の影響を与えることが示唆された (Figure10)。

4. 研究成果

小学校高学年から高校生まですべての調査対象において、「固定的な集団指向」が学級の離散的な雰囲気に影響を与え、離散的な学級雰囲気が、「独占的な親密関係指向」を強めることにより、「固定的な集団指向」が強まるという循環的な過程を、女子児童・生徒についてのみ示唆する結果を得ることができた。また、小学校高学年女子に関しては、独占的な親密関係指向が、学級適応感に負の影響を与えることも示唆された。

こうした結果を基にして、児童・生徒の適応感を高める指導・支援の方法を具体化したり、学級雰囲気を改善する取り組みに本研究の成果を取り入れ、学級経営の具体的な改善策を考えたりするなどして、児童・生徒の学校適応感の向上につとめたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

①三島浩路, 高校生の仲間集団と学級適応—仲間集団の排他性と学級雰囲気との関連, 中部大学現代教育学部紀要, 5, 19-27, 2013, 査読有り

②三島浩路, 小学生の仲間集団と学級適応—仲間集団の排他性と学級雰囲気との関連, 応用心理学研究, 38(2), 114-121, 2012, 査読有り

③三島浩路・橋本秀美, 中学生の友人関係と学級適応—仲間集団の排他性と学級風土との関連, 中部大学現代教育学研究紀要, 4, 13-20, 2011, 査読有り

④三島浩路, 小学生の社会的スキルと友人関係における排他性・学級適応感との関連, 中部大学現代教育学部紀要, 2, 49-55, 2010, 査読有り

〔学会発表〕(計5件)

①三島浩路, 高校生の友人関係と学級適応—仲間集団の排他性と学級適応の関連, 日本カウンセリング学会, 2012年10月28日, 麗澤大学

②三島浩路, 友人関係・学級雰囲気といじめ被害との関連—高校生を対象とした調査結果から, 東海心理学会, 2012年5月26日, 日本福祉大学

③三島浩路, 学校生活適応コミュニケーション

ンスキル尺度の開発, 日本グループ・ダイナミックス学会, 2011年8月24日, 昭和女子大学

④三島浩路, 友人関係における排他性と学級雰囲気の関連, 日本応用心理学会, 2010年9月11日, 京都大学

⑤三島浩路, 中学生の友人関係における排他性と学級適応感, 日本カウンセリング学会, 2009年8月19日, 活水女子大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三島 浩路 (MISHIMA KOJI)

中部大学・現代教育学部・教授

研究者番号: 90454371